



IPSJ Magazine

[巻頭コラム]

「美」と「ロマン」

■ 村岡 洋一

3 極管の 300B のすすり泣くような音にぞくっとしたりすることはあるけれども、この歳になるまで、凡人の私には「美」の定義がよく分からない。

懐石料理のように歴史に支えられた様式美を味わうと「美」は伝統かとも思うけれども、昨日まで相手にされなかった「キュービズム」や「アンディ・ウォーホル」の作品が突然注目されるような現象を見ると、これは作者のパッションとそれを受け入れる感性を持った人だけの世界かとも考える。「いちめんのなのはな」のリズムに酔ったものとして、「ab さんご」の横書きには戸惑わざるをえない。

カントによれば、「美とは対象の持つ主観的合目的性に由来する快感」であるということであるけれど、難しすぎて実感として分からない。繰り返し、凡人としては多数の人に受け入れられる「美」というものがあるのか、またあるとしてその実態は何か非常に興味があるところではある。

「美」が感性の世界の概念なのか、「真」や「善」のような価値判断にまで踏み込むべき概念なのかといった議論は哲学者に任せるとしても、もし後者に近いのであれば、コンピュータサイエンスの世界の「真」の追求は「美」の追求なのかもしれない。

次に「ロマン」はどうであろう。辞書によれば、「ロマン」とは「強いあこがれを持つこと」だそうで、そうすると「美」を求めることは「ロマン」に繋がることになる。 「あこがれ」というのは「まだ見ないもの、会えないもの」を探し求めるということになるが、「まだ

■ 村岡 洋一
早稲田大学名誉教授

早稲田大学工学部卒業。イリノイ大学 Ph.D.。電電公社電気通信研究所を経て、早稲田大学理工学術院教授。早稲田大学副総長、本会副会長、日本学術会議会員、年金業務監視委員会委員などを歴任。本会名誉会員。



見ぬもの」にも、存在は知っているけれどまだ見たことはないものもあれば、存在すら知らないが見てみたいものもあろう。後者の場合、ロマンを作ること自体がロマンと言えよう。

昔はこのような「まだ見ぬもの」へのあこがれはごく普通だったと思う。ところが最近は何でもインターネットで探せるので、「まだ見ぬもの」がないかのような錯覚に陥ってしまう。ロマンは欠如していないかしら。

以上は一般名詞としての「ロマン」であるが、それでは固有名詞としての「ロマン主義」はどうであろうか。ロマン主義は、それまでの理性や合理性重視の考えから、感受性や主観に重きをおいた。ロマン主義は、一言で表すなら「幻想」「あこがれ」「感情」など「自然への憧れ」ということになる。たとえば、音楽の分野では形式を重んじ神を称えるバッハなどの作曲家に比べて、自由な作風の音楽を次から次へと生み出したベートーベンが初期のロマン派作曲家とされている。

さてそれでは改めて、コンピュータサイエンスの世界にも「美」とか「ロマン」ないし「ロマン主義」は必要だろうか。理性偏重、合理主義のコンピュータサイエンスの世界に竿をさしたら、何か面白いことが生まれませんか。

そう言えば、ホイジンガによれば遊びは文化よりも古く、「ホモ・ファーベル」（作る人）よりも「ホモ・ルーデンス」（遊ぶ人）が先にあるということだが、何か相通じるものがあるのでは。

